

江山文庫のまわりで句碑・歌碑めぐり 短歌・俳句の道ご案内

かつて与謝蕪村・与謝野晶子らが訪れた短歌と俳句のまち、与謝野町。
短歌と俳句の殿堂・江山文庫の周辺には、当地ゆかりの文人たちが
詠んだ俳句や短歌を刻んだ石碑がございます。
与謝野町にちなんだ句や歌が記された石碑を、歩いてめぐる道…
「短歌・俳句の道」をご紹介します。



●与謝野晶子歌碑
(江山文庫中庭)

与謝野町文化・工芸の里

短歌と俳句の資料館
江山文庫



●与謝野鉄幹歌碑
(町道滝桜内線)

リフレかやの里



●高濱虚子句碑
(リフレかやの里駐車場内)

平林キャンプ場へ



●与謝野礼厳歌碑
(道の駅敷地内)

大江山
運動公園

町民体育館

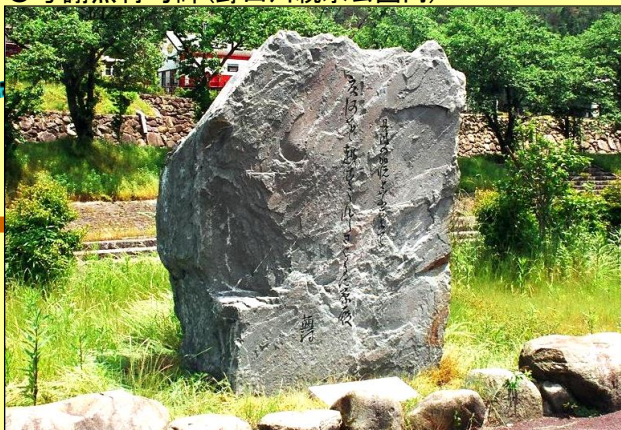
道の駅

至宮津

国道176号

至福知山

●与謝蕪村句碑(野田川親水公園内)



野田川

SL広場

野田川親水公園

豊潤な文化の薫りただよう与謝野町で、
さまざまな文人たちの句碑・歌碑
めぐりを心ゆくまでお楽しみ下さい。

与謝野町教育委員会

高濱虚子句碑(リフレかやの里内)



ひんがしに日の沈みくる花野哉
虚子

高濱虚子(一八六四～一九五九)

正岡子規に俳句を学び、明治・大正・昭和にわたり活躍し、地域ゆかりの与謝野鉄幹とも交流しました。大正四年(一九一五)、虚子四十二歳の一句です。

◆「花野」は秋草の咲き乱れた野。東の方から夜が白み始めたが、太陽はまだ沈んでいる。けれども秋草が一面に咲いた花野は、すでに明け方の微妙な光をうけ輝いている…日が昇りはじめる直前の、空と大地の美しき一瞬を詠んでいます。短歌と俳句の館・江山文庫が所蔵する、直筆掛軸の文字を石に刻みました。

平成十六年 加悦町設置

与謝野晶子歌碑(江山文庫中庭)



いと細く香煙のごとあてやかに
しだれざくら枝の重る 晶子

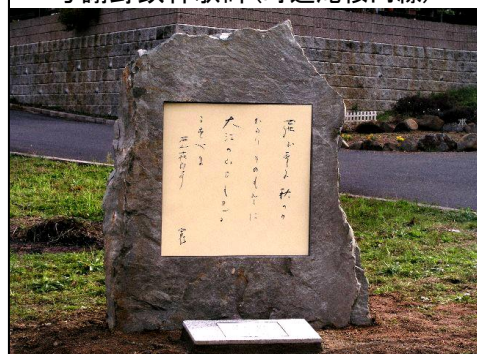
与謝野晶子(一八七八～一九四二)

「みだれ髪」刊行とともに明治の歌壇に一大センセーションを巻き起こした与謝野晶子。この歌は昭和三年に刊行された歌集「心の遠景」に収録されました。

大正十四年ごろ、知人から自宅の庭にしだれ桜を贈られて詠んだもの。枝ぶりの大きなしだれ桜の美しさを詠んだ歌の背後には源氏物語を生んだ王朝の昔への憧憬が感じられます。赤・青・緑三色の美しい継色紙に書かれたこの作品をそのまま信楽焼で再現しました。

平成六年 富村俊造氏寄贈

与謝野鉄幹歌碑(町道滝桜内線)



飛ぶ雲に秋の日ひかりそのもとに
大江の山のもれるうすべに 寛

与謝野鉄幹(一八七三～一九三五)

短歌革新を唱え、明治三十年代の日本浪漫主義運動を主導した与謝野鉄幹(本名寛)。彼が昭和六年秋に父・与謝野礼蔵の生地であるここ与謝野町を訪れたときの作品です。

「西山荘即事」とあり、与謝野町字加悦の杉本治助氏の隠居所・西山荘で詠まれた歌であることがわかります。鉄幹が当家に書き残した色紙をそのまま陶板で再現しました。下の句「もれる」は「盛れる」と書くこともあり、山肌一面を薄紅色に染めた大江山の秋の美しさをうたっています。

平成十五年 加悦町設置

与謝野礼蔵歌碑(道の駅敷地内)



見も聞きも涙ぐまれて帰るにも
心ぞ残る予謝のふるさと 礼蔵

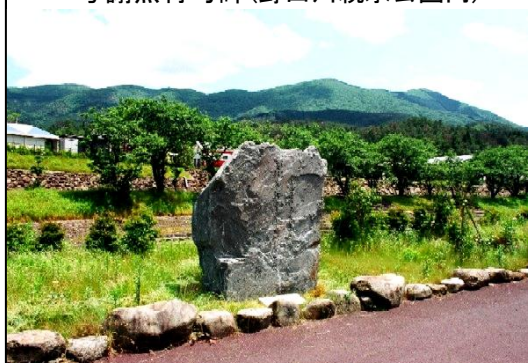
与謝野礼蔵(一八三三～一八九八)

与謝野鉄幹の父で歌人・僧侶であった礼蔵法師は文政六年、丹後与謝郡温江村(現在の与謝野町字温江)に生まれました。幕末は勤皇活動に奔走、維新後は各種事業に携わった彼の功績は加悦町字温江の生家近くに設置されている「礼蔵法師追念碑」で詳しく見る事が出来ます。

歌は明治二十五年春の作品。事業で国中を奔走していた礼蔵がしばらくぶりに当地に帰ってきた際に詠んだもので、故郷への切なる思いにみちているようです。

平成十四年 加悦町設置

与謝蕪村句碑(野田川親水公園内)



丹波のか悦といふ所にて
夏河を越すうれしさよ手に草履 蕪村

与謝蕪村(一七二六～一七八三)

江戸時代中期、俳句と絵画の両面で幅広く活躍した蕪村は、宝暦四年(一七五四)から三年間、宮津に滞在しました。この間に蕪村は当町にも訪れており、与謝野町字滝の施薬寺には彼の描いた屏風が残っています。与謝野町は蕪村の母のふるさとと言われています。亡き母をしのんでこの地を訪ねた蕪村は少年時代に思いをはせ、この句を詠んだのかも知れません。

平成十三年 加悦町設置